

勇者の誕生

——「走れメロス」小説——

濱 森 太郎

要旨 本稿は、太宰治作「走れメロス」(『新潮』昭和十五年五月発表)の作品の仕組みと文化的な背景を論じたものである。結論を要約すると次のようになる。

『走れメロス』の作品世界は、メロスの村(牧人社会)とディオオニス(ポリス)との二つの世界から成り立っている。また、この牧人社会とポリスとの中間には、「川」と「峠」とが設定され、それらが「牧人社会」と「都市国家」との境を区切る「境界」の役割を果たしている。しかも、その境界に、洪水や山賊という一層困難な条件が追加されることで、メロスの力走は単なる「越境」の域を越えて、ほとんど「苦行」の意味を持つ事になる。つまり、メロスは、この「苦行」を通じて一層高揚し、純化しながら、終末の刑場の場面に立ち至るのである。

次に、重要な事は、こうした別世界への「越境」を主題とした太宰の物語の構図が、例えば、須佐之男命や大国主神、更には、桃太郎や一寸法師など、我が国の神話やおとぎ話でお馴染みの「英雄誕生」の物語の構図とも重なり合うことである。駒木敏氏によれば、こうした別世界の構図は、元は「それぞれの祭祀共同体が、アイデンティティの依り所として探り求めた神のトポス」だったというが、「いずれの異界にせよ、ナカツクニとの接点にサカ(ヨモツヒラサカ・ウナサカ)」を持ち、それを越えることで、神々は自分のアイデンティティを確立するのだと言う。こうしたアイデンティティ確立の意味を持つ伝統的な物語の構図の取り込

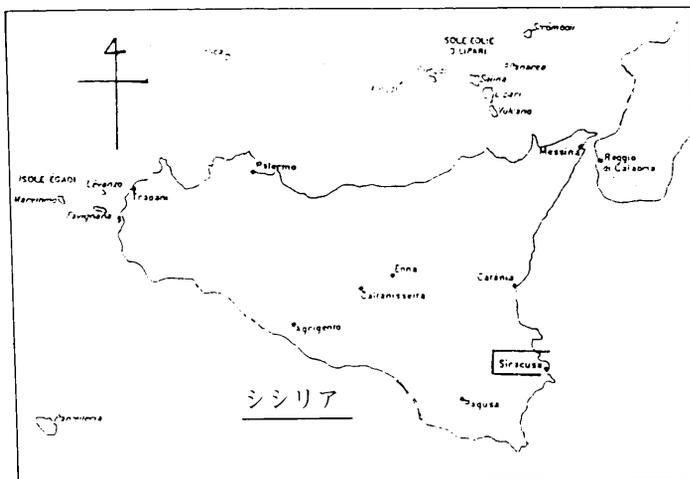
みもまた、太宰の創作の結果である。

最後に、もう一つ重要な事は、原話の世界の二人が、思想信条を共にした修道会の「同志」だったのに対して、『走れメロス』の中のメロスとセリヌンティウスとは同じ村に育った「竹馬の友」と設定されている事である。もし、原話の中の友情を「同志的結合」と呼ぶなら、太宰が描いた友情は「地縁的結合」と言うことも出来るだろう。この「地縁的結合」の特徴が、厳しい訓練や思想信条の錬磨を問わず、人と人々を包括的に結び付ける母性的なものであるために、この物語の結末では、国王ディオオニスも容易に二人の友情の輪の中に迎え入れられる。

こうした各種の改訂を通して、太宰はここに、神話的な構造を備えた、極めて日本的な「地縁の絆」の危機と再生の物語を誕生させたのである。

一 はじめに

海上から眺めるシラクサの景観は、イオニア海の真珠に喩えられる。丘陵のなだらかな斜面は緑の葡萄やオレンジの葉に縁取られ、白い石造りの家屋は強い南国の陽光に輝いている。もし、太宰治が一度でもこの景観を眺めていたなら、『走れメロス』(『新潮』昭和十五年五月発表)の中のメロスは、決して日没の太陽を追いかけて東から西に走



としても、それで、メロスが落日に向かって力走する筋立てが、充分に説明できる訳ではない。

では、メロスは何故わざわざ日没の太陽を追いかける形でシラクサに辿り着く必要があったのか。

私が、こうした地理的な齟齬に改めて注意を喚起するのは、勿論、作者の揚げ足を取ろうとするからではない。私は、こうした齟齬を手懸かりにして、作者の意識や無意識の領域に改めて注意を喚起し、その上で、この作品の新しい風貌を照らし出したいと思っている。そう

ったりはしなかっただろう。シラクサはシシリア島の東の端に有り、さらにその東はイオニア海である。地図の上をいくら眺めても、この海上に東から西に走る陸路が有る訳ではない。メロスは海上を走ってシラクサの街にやってきたのだろうか(注1)。

もとより、これは、太宰治の預かり知らぬ事実だった可能性も大きい。だが、もし太宰治がシラクサの景観をまったく知らなかった

すれば、それは自ずと、第二次世界大戦という最も困難な時代を独自の姿勢で生き抜かざるを得なかった太宰治という作家の意外な心性を説き明かす事にもなるだろう。

二 「暴虐」の素地

さて、早速ながら、この物語冒頭の、もつとも素朴な疑問から始めよう。主人公メロスは、妹の結婚式の準備のためにシラクサの町にやって来て、この町の異様な静けさに首をかしげた。そして、先ず、道行く「若い衆」に事情を尋ね、さらに行きずりの老人を問い詰めて、やっと国王の暴虐の噂を聞く。不思議なのは、その時の彼の言動である。その時、メロスは、直ちに「おどろいた。国王は乱心か。」と言葉を発し、次いで、国王の暴虐の原因が国王の人間不信に由来すると聞かされて、「呆れた王だ。生かして置けぬ。」と激怒する(注2)。

勿論、メロスは、最初からこの町の奇妙な寂しさには気付いていた。さらに、老人に出会って、強引にその訳を聞き出しもした。国王の暴虐が原因なら、なるほどこの町の奇妙な静けさも納得は出来る。

だが、その納得にも関わらず、このメロスの反応には、大きな飛躍がある。その飛躍の一つは、誰も真実を語りたがらないこの町で、彼が見ず知らずの老人の言動を直ちに信じること。二つ目は、彼が噂の国王の複雑な立場や家族関係など、事件の背後の隠れた事情を全く考慮せず、いきなり「生かしては置けぬ」と激怒すること。三つ目は、自分の立場や利害に無頓着なこと。

これがもし私達なら、多分「呆れる」事はあっても、後には必ず事実を確認する。まして、メロスはシラクサの住民ではない。国王が何をしようと、他国の事と片付けることも出来なくはない。

ところが、メロスは、いきなり「呆れた王だ。生かして置けぬ。」と激怒した。彼の「激怒」に格別の説明は無いが、その場合は、それがメロスの常識だったと考える必要がある。では、その常識によると、なぜディオニスの暴虐は直ちに死に値するのかわかる。改めて、ディオニスに殺害された人物を最初から順に並べてみよう。

(1) 「妹婿」	(2) 「世継ぎ」	(3) 「妹」	(4) 「妹の子」
(5) 「皇后」	(6) 「賢臣アレキス」	(7) 「大勢の家臣」	

次に、この死者達の順列を国王の「家族」(1・2・3・4・5)と国王の「家臣」(6・7)とに二分してみよう。

* 「家族」	(1) 「妹婿」 (2) 「世継ぎ」 (3) 「妹」 (4) 「妹の子」 (5) 「皇后」
* 「家臣」	(6) 「賢臣アレキス」 (7) 「大勢の家臣」

そうすれば、ディオニスの殺人が先ずは自分の「家族」に始まり、次いで「家臣」にまで拡大していったことが見えるだろう。つまり、ディオニスの人間不信も、最初は小さな「家族」の中の人間不信から始まったのである。

しかも、念の為に言えば、どうやらディオニスの「家族」の総てが、彼の不信の対象だったわけではない。その証拠に、ディオニスに殺さ

れた人々は、彼の家族の一部分であって、総てではない。では、何故、これらの人々が、まず最初に疑われたのか。

ふたたび、ディオニスに殺害された「家族」の順列(1・2・3・4・5)の中に立ち帰ってみよう。そして、この家族の隠れたつながりを、とりわけ詳細に眺めてみよう。そうすれば、この「家族」が、実はさらに次の二つの係累から成り立っていることに気付くだろう。すなわち、その一つはディオニスの「妹」の係累であり、もう一つはディオニスの「皇后」の係累である。

「妹」の係累	(1) 「妹婿」 (3) 「妹」 (4) 「妹の子」
「皇后」の係累	(2) 「世継ぎ」 (5) 「皇后」

つまり、ディオニスの最初の人間不信をさらに腑分けすれば、その一つはディオニスの「妹」とその係累に対する不信となり、もう一つは「皇后」とその係累に対する不信となるのである。

では、さらに何故、この二組の女系が、真つ先に疑われるのか。

社会学の教えるところに依れば、通常、家族は夫婦の結合によって辛うじて維持されているが、本来、二つの血族が融合するための熱い坩堝である。そのため、家族の内には習慣や常識や利害の相違が常に内包されており、しばしば衝突の原因となる。しかも、古代にあつては「母方血縁家族」は、生活と住居とを「生涯にわたって」共有する結束の強い家族であり、また、家族内の「攪乱要因の主たるもの(＊つまり夫)」を予め排除している点で安定性の高い家族でもあった(注3)。

一方、この母系に対して、「夫」の立場が極めて虚弱だった事は、エングルスの『家族、私有財産及び国家の起源』以来余りにも有名である（注4）。すなわち、古代の牧人達の社会（母系社会）では、夫はせいぜい妻が継承した財産の管理人に過ぎず、また生まれた子供も、妻の実家の一員に数えられた。そのため、子供達には父の財産を相続する権利が与えられなかった。父の財産は（もともと無いに等しかったが）「まずもって死亡者（父*）の兄弟姉妹と彼の姉妹の子とに、または彼の母の姉妹の子孫の手にうつった。」（注5）。

ちなみに、地中海地域の母系社会に詳しいジェルメーヌ・ティリヨンによると、今日でも母系地帯では、男子はなるべく家にとどめ、女子は喜んで外に出すが、その理由は、女子を外に出すことでたくさんのお甥を獲得する事が出来、その甥の働きが一族の使用人や兵士の数を増やすことになるからだと言う（注6）。また、離婚の際にも、妻は、彼女の兄が夫にたくした家畜と家財とを引き上げるが、逆に、夫が、妻の兄にさしだした婚資はほとんど返却されないと言う。こうして、男たちはいつも義理の兄が所有する家畜の世話をし、その乳を飲んで暮らすことになるのである（注7）。

こうした母系社会の感覚で眺めれば、「夫」ディオニスの立場の意外な危うさが見えるだろう。彼が、もしうかつな男なら、彼はたちまち「妹」の係累に従属し、「皇后」の係累からは排除されるのである。当然、ディオニスは、先ずもって自分の家族の中で常に身構えていなければならなかったに違いない。

だが、一方、これを「牧人」メロスの立場から見れば、ディオニスの日々の不安や暴虐は、それこそ狂気の沙汰、家族と社会の根幹を犯す重大な犯罪と見えるだろう。特に、母系社会にあつては、母系に対する殺害は、家系の断絶を意味するからである。もとより、「邪悪に対

して「人一倍に敏感」なメロスは、「激怒」するに違いない。

三 デイオニスの立場・デイオニスの論理

しかし、さらに念の為にいえば、物語の舞台は、紀元前四世紀初頭のシリアのポリス「シラクサ」である。

当時の「シラクサ」は、アテネ・スパルタと並ぶ地中海の代表的なポリスで、最盛期の人口は約三十万人（注8）。当時を偲ばせるシラクサの古代遺跡は、今も白い旧市街の背後、イオニア海を望む丘の上にある（注9）。

そして、社会学者たちの報告に依れば、この時期のポリスの妻達は、すでに一族の財産の継承者ではなく、「嫡子の母」一家の「家政婦長」・「女奴隷の監督者」であるに過ぎなかったという（注10）。当然、家庭は「父」を中心に営まれ、父の資産はその嫡子に相続されていた。つまり、メロスの村とディオニスのポリスとは、母系の持つ意味が大きく喰い違っていたのである。

その上、ディオニスには、たとえば家族の阿鼻叫喚をかくぐって、もポリスを維持しなければならない国王としての立場や責任があつた。

今、このポリスの歴史に立ち入つて言えば、古代の「シラクサ」に最初の帝国を築いたのは、ゲロンとヒエロンの兄弟だが、この兄弟の死後、市政は混乱し、紀元前四二七年と紀元前四一五年との二度に渡って、アテネの侵略を受ける。この時、卓越した政治力でシラクサの危機を救った人物の名をヘルモクラテスと言う。先のディオニス一

世(前四三〇年頃に前三六七年)は、このヘルモクラテスの娘と結婚して権力に近付いた人物である。彼は、まずシラクサの傭兵を与かる將軍職に付き、続いて他の將軍達を排除して親衛隊を組織し、やがてシラクサを支配する全権將軍にまで昇進する。彼の権力基盤はこの親衛隊の軍事力に有り、軍事的な成功が彼の威信を高めた。彼はシラクサの街を要塞化すると同時に、大艦隊と大量の武器を調達して、シリリア島から南イタリアにまで勢力を拡大した(注11)。

要するに、実在のディオニスは、こうした巨大な軍事力を背景にした要塞都市の「覇者」でもあったのである。その「覇者」を「暴君」と呼ぶことは有るにしても、それは我国で徳川綱吉を大公方と呼ぶのに等しい。その言葉に捕らわれて、彼がただ犬だけに聞かずらわった將軍だと考える者はまず有るまい。

さて、再び物語に立ち帰ってみよう。この物語の冒頭近く、警吏に捕縛されたメロスがディオニスの前に引き出される場面がある。その場で、メロスは「人の心を疑ふのは、最も恥づべき悪徳だ。」とディオニスを非難し、一方のディオニスは、かさにかかった口ぶりで「人間は、もともと私慾のかたまりさ、信じては、ならぬ。」と応酬する。これもまた、二人の立場の相違が生み出した常識の相違だが、実はこのディオニスの応酬にも、意外に大きな飛躍が隠れている。

例えば、普通、私達は、私利私欲に走ることを素晴らしいことだとは考えない。だが、逆に、それが死に値する大罪だとも思ったりはしない。誰もが家庭を営む必要上、多少の私利私欲を必要とするからである。ところが、国王ディオニスにとっては、シラクサの市民が私利私欲に走ることは、許しがたい悪事だった。まして、自分の家族や家臣達が私利私欲に走ることは、死に値する大罪だった。

では、ディオニスは、何故私利私欲にこれほど過激で過敏なのか。

考えてみれば、これも、まったく有り得ない話ではない。例えば、我国でもつい五十年前にそういう時代があった。この時、「皇道」を實現すると称した一部の軍人將校達は、政府高官の私利私欲を極端に憎み、「不逞兇悪ノ徒簇出シテ、私心我慾ヲ恣ニシ、」(従ツテ外侮患日ヲ追ツテ激化ス)(二・二六事件「趣意書」)と主張していた。今、当面、「走れメロス」が発表された昭和十五年五月の直前に限ってみても、日本は、日中戦争の只中であつて呻吟していた。

昭和十五年三月九日、衆議院聖戦貫徹決議。

同年 四月八日、国民体力法公布。

同年 四月十日、米穀強制出荷命令発動。

同年 四月十二日、石炭配給統制法実施。

同年 四月二十四日、米・味噌等生活必需品の切符制の採用。

同年 同月同日、陸軍志願兵令公布。

時の政府は、この一連の統制策によって、総ての国民が等しく困難に直面し、等しく犠牲を分かち合う事を求めている。当然、一人一人の私利私欲は厳しく非難されていた。

国王ディオニスが、傭兵隊を基盤にしたポリスの「覇者」だった事は既に述べた。彼もまた、軍人の常として、軍備を充実して戦い続け、その戦いに依つて、ポリスに平和と繁栄とを約束することが出来なければ存在意義を失う。まして、周囲のアテネやスパルタが拡張政策を進める時に、シラクサだけが私利私欲にふけるならば、シラクサの將來は知れている。それを考えれば、ディオニスは否応なく家族や家臣達の私利私欲に過敏にならざるを得ないのである。

しかも、その一方で、もともと、ポリスの「覇者」と言えども、「所詮その存在は、富者と貧困な自由民、また貴族と自由市民との勢力均衡」によってようやくその権力を保つ存在に過ぎなかつた(注12)。

したがって、ディオニスがもし愚かにも自ら進んでその均衡を崩すならば、彼は自ら進んで自分の墓穴を掘ることになるのである。当然、ディオニスは、暴虐を重ねることによって自分の地位を危険に晒している。勿論、ディオニス自身の焦りや苛立ちも、その危機を加速したに違いない。その結果、彼の危機は一層深まり、彼の人間不信はさらに募るのである。

四 「対立」

さて、一方、そのディオニスに向かって「人の心を疑ふのは、最も恥づべき悪徳だ。」と非難するメロスが、ディオニスのこの困難な立場を理解していたとは考え難い。そのため、両者の会話は、はじめから共通の基盤を欠き、したがって、その思想の食い違いを際立たせるだけに終わる。「おまへがが？」「仕方の無いやつぢや。おまへなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」「だまれ、下賤の者。」など、ディオニスは、会話が進むにつれて次第に激しくメロスを蔑視するようになる。

だが、それにも関わらず、メロスは重ねて「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」とディオニスを嘲笑する。この時、メロスは彼自身が考えるよりも遙かに激しくディオニスを挑発しているのである。

もつとも、ディオニスにも嘲笑されるだけの失点が無かつたとは言いきれない。もともと、いずれの国家においても、將軍達は非常時には、概ね独得の才能を発揮して、表向きはディオニスのように「わしだって、平和をのぞんでゐる」と弁解しつつ、熱心に戦場を拡大する。例えば、昭和三年六月四日の張作霖事件でも、昭和六年九月十八日の柳条湖での鉄道爆破事件でも、將軍達は、自ら中国軍を挑発しながら

「自衛手段」と称して中国を占領したのではなかつたか。

メロスをして「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」と叫ばせた太宰治が、そうした將軍達の習性を見抜いていたことは疑い無い。彼は、その將軍達の習性を間近に見ながら『走れメロス』（『新潮』昭和十五年五月発表）の主題を温めたのである（後述）。

ところで、その『走れメロス』において、メロスとディオニスとが対照的な役割を割り振られている事は誰の目にも明らかだが、今それを、論旨の都合で、大ざっぱに纏めると次のようになる。

		メロスの立場	ディオニスの立場
地位	牧人	国王	
生業	牧畜	政治	
居住地	村	ポリス	
住居	農家	王宮	
気質	正義漢	暴君	
言動	単純	疑い深い	
現状	妹に婿を迎える	親族・賢臣を殺す	

この表を一覧すれば、メロスとディオニスとが、どれほど対照的な立場に立ち、どれほど対照的な思索の中に居るかが見えるだろう。また、もし、この二人が対立する形で出会うなら、その結果はマンゲースとコブラのような深刻な出会いになるだろう。

さて、メロスに挑発されたディオニスは、先ず、「だまれ、下賤の者」とメロスを侮辱し、次に言葉を継いで、「おまへだって、いまに、磔に

なつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」とメロスを脅す。言葉はもつぱらメロスを威圧することに費やされてはいるが、その裏には「俺の目の確かさを知らぬか。」という専制君主にありがちな無言の奢りが隠されている。多分、シラクサの市民が相手なら、ディオニスの威圧はたちどころに相手の勇気を打ち砕いたものと思われる。

ところが、メロスは、この世に神以外にも必ず服従しなければならぬ權威が有ることを知らず、人が様々な思惑の中で生きている事を信じない。また、彼は、自分が威圧されたと見て取れば、たちどころに前後を忘れて激しく反発する別世界の「野人」でもある。そのため、威圧を狙ったディオニスの言葉は、ただメロスの反感を買うだけに終わる。メロスはあからさまにディオニスの自惚れを指摘する。

ああ、王は利巧だ。自惚れてゐるがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞ひなど決してしない。ただ、——。

この時、メロスの心を占めているのは、ディオニスに対する激しい軽蔑と揶揄の感情である。その上、メロスの心裏にも、「俺を見くびつたな」という怒りがある。メロスの場合は、この「怒り」の感情が曲者である。この感情のために、メロスは時折前後を忘れていらぬ自負心を振り回す。たとえば、「私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞ひなど決してしない。ただ——」などは、その好例である。

だが、相手は危険な暴君である。彼は、寛容や忍耐とはかけ離れて暮らしている。その彼を重ねて罵倒すれば、メロスは否応なく反逆者と見なされる。それと同時に、「おまへだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」というディオニスの威嚇は、もう仮定の話では無くなつてしまふ。

今度は、ディオニスが、まるで小鳥の巢を狙う蛇のように残忍にメロスを挑発する番である。

「ばかな。」と暴君は唄れた声で低く笑つた。「とんでもない嘘を言ふわい、逃がした小鳥が帰つて来るといふのか。」

この時、彼は紛れもなく残酷な「暴君」になつてゐる。一方「小鳥」に喩えて隠微に揶揄されたメロスは、この挑発に耐えかねて、うかつにも再び口を開く。「私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰つて来なかつたら、あの友人を絞め殺してくださう。たのむ。さうして下さい。」

この飛躍したものの言いもまた、半ばは、いらぬ自負心の成せる業である。自分の言葉を重からしめるために、友人の命を「担保」に差し出すのは愚に過ぎる。その上「たのむ。さうして下さい。」というメロスの口調は、哀願の調子を帯びている。

だが、それにしても、メロスは何故これほど強く、妹の結婚に執着するのか。勿論、兄が妹の将来を気遣うことに不思議はない。だが、普通の兄なら、そのために友人の命を「担保」に差し出したりはしない。既に、妹に婚約者がいるのなら、その将来は、婚約者に託する事も出来る。また、このシラクサに親友がいるのなら、彼に後のことを頼む事も出来る。それに、そもそも我々の常識で言えば、一家に兄・妹の二人が居る場合、妹に「婿を迎」えなければならぬ理由があるだろうか。

しかし、勿論、メロスにとっては、妹に「花婿」を迎えることは、当然の事で有り、かつ是非とも自分の手で成し遂げなければならぬ重大な責務だった。

では、何故それは当然の事であり、かつ重大な責務なのか。今、念の為に原文を確認すると、シラーの原作では、その箇所は「Bis ich die Schwester dem Gatten gefreit.」(Schiller's Werke: National Ausgabe Bd.2)とあり、太宰治が参照したと推定されるシラーの「人質」

〔小栗孝則訳「新編シラー詩集」(改造社文庫第二部第三百編)でも「妹に夫をもたせてやる」と翻訳されている。この言葉には、勿論、妹に「婿」を迎える意味はない。妹は、嫁に行くのである。それをわざわざ「村の或る律気な一牧人を、近々、婿として迎へる事になつてゐた。」と表現し直したのは、太宰治である。〕

妹の結婚が格別重要な理由は、おそらくは、この「花婿」を迎えることの中にある。何故なら、母系社会では、妹が「婿」を迎えることで、初めて、家族の財産も地位も名誉も綺麗に次の世代に継承されるからである。また、この母系社会では、それを綺麗に成し遂げることが、メロスを初め多くの兄達の重大な責務でもあったのである。

さて、一方、メロスの哀願を聞いた時、ディオニスは勿論「残酷な気持ちで、そつと北叟笑んだ」。けれども、この時、彼はまたも、メロスを憎む余りに、君主の立場からは大きく逸脱している

わしは悲しい顔して、その身代わりの男を磔刑にしてやるのだ。
世の中の、正直者とかいふ奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。

かつて、封建君主達がどれだけ正直者を喜び、表彰に励んだかは、言うまでもないだろう。たとえポリスの「覇者」であろうとも、為政者の地位に居る限り正直者は宝である。その証拠には、首相もニュースキヤスターも駅員も医者も戸籍係も警官も皆一斉に嘘をつく巨大なエイプリル・フールの一日を思い浮かべてみればよい。嘘の恐ろしさ、身に沁みて分かるだろう。だが、今のディオニスは、メロスを憎む余りに、その正直者全体を憎んでいる。これでは、ディオニスは、もう「暴君」でさえない。

だが、しかし、ディオニスの挑発は、さらに執拗に続く。
「ちよつとおくれて来るがいい。おまへの罪は、永遠にゆるして

やらうぞ。」

「なに、何をおつしやる。」

「はは。いのちが大事だつたら、おくれて来い。おまへの心は、わかつてゐるぞ。」

こうして、ディオニスの挑発は見事に完成する。けれども、その結果、ディオニスは、実際以上に残忍な「暴漢」になり、メロスは逆に是非とも面目を施さなければならぬ正直者の鏡となった。

五 「越境」と「試練」のドラマ

ところで、こうしたメロスとディオニスとの「出会い」と「対立」を描く物語冒頭部の各場面は、勿論太宰の創作であつて、シラーの原作「人質」には登場しない(注13)。その意味で、この物語が太宰によつてメロスとディオニスとの葛藤を描くドラマとして仕立てられた事は疑いない。だが、それでは、どのような性質を持ち、どのような意味を持つドラマだったのか。

これを考える上で、意外に重要な意味を持つのは、メロスの帰省の場面である。この場面で、メロスは、早速故郷の村に帰り、妹の婚礼の準備に取り掛かるが、その際、彼が最初にしたことは、妹に向かつて、こう伝えることだった。「さあ、これから行つて、村の人たちに知らせて来い。結婚式はあすだ」と。続いて、メロスがしたことは、家に帰つて「神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ」ることだった。ところが、肝心の花婿の家を訪ねて「結婚式を明日にしてくれ」と切り出すのは、その翌日になつてゐる。その上、花婿はわけも知らされずに、強引に説得される。これでは花婿の都合や立場は、ほとんど無視されていると言つてよい。

今、念の為に言えば、メロスは貧しい牧人で、客でも有れば自分は「羊小屋」に眠るような小さな家に暮らしている。また、彼が、少々は横暴も許されるような村の顔役の地位に居るわけでも無い。とすると、メロスは、この時、ただ粗暴な牧人として振舞っているのか。

その答は、花婿の応対に現れている。メロスの申し出を受けた花婿は、最初先ず「驚き、それはいけない、こちらには未だ何のしたくも出来てゐない、葡萄の季節まで待つてくれ」とメロスに頼む。先にも述べたように、牧人の社会では、花婿は、結婚に先だつて、花嫁の兄に婚資を差し出す必要がある。そのためにも、花婿は、是非とも収穫の季節まで結婚を待つ必要があつた。おまけに、これは有難くない話だが、彼の離婚に際しては、妻は、彼女の兄が夫にたくした家畜と家財とをすべて引き上げるが、逆に、夫が結婚に際して彼女の兄にさしだした婚資はほとんど返却されないという(注14)。

私達にはやや異様だが、要するにこれは、もともと花嫁の兄に権威があり、その権威の元に結婚の一切が執り行われる牧人社会の習慣に即したものだとして理解する必要がある。つまり、メロスの村では、婚礼の日取りも、婚礼の手順も、祝宴の準備も、そして新生活のための資産もまた、花嫁の兄の援助で調えられるのである。

もともと本来なら、新生活のために分け与えられる羊は、兄が所有する羊の一部分に過ぎないが、メロスは、花嫁・花婿を前にしてこう申し出る。「私の家にも、宝といつては、妹と羊だけだ。(中略)全部あげよう。」事情を知らない花婿は、この過分な申し出に「揉み手して、てれ」たという。この殷勤な動作も、今の花婿の立場にはふさわしい。

さて、こうして描かれた村の結婚式に続いて、いよいよメロスの力走の場面が始まる。この力走の場面が、太宰がシラクサの実際の地形

を無視してまでわざわざ演出した場面であることは既に述べた。また、この力走の場面が、読者のもっとも共感する場面である事も既に衆知の事実である。そのせいもあつて、この部分には、特に詳細な分析が繰り返されている。例えば、東郷克美氏の「走れメロス」をめぐって「国文学」昭和三十八年四月号)、佐藤善也氏の「走れメロス」(「国文学」昭和四十二年十一月号)などが、その好例である。

これらの好例に対して、私に加えるもの一つは、この牧人社会とポリス「シラクサ」との距離が十里と設定されている事の意味である。この十里という距離は、古代の集落が、主として交通の制約のために、最大でも人間が徒歩で日の出から日没までの間に往復できる距離の範囲内に形成されていた事と符合する。つまり十里の距離は、明らかに都市の圏外を意味するのである(注15)。

また次に、この牧人社会とポリスとの中間には、「川」と「峠」とが設定されている事も重要である。勿論、この設定は太宰が造り上げた架空の地形だが、その架空の「川」や「峠」は、「都市国家」と「牧人社会」との堺を区切り、いわば「境界」の役割を果たしている。

ただし、その「川」や「峠」は、メロスにとっては単なる「境界」ではない。そこに、渡り難い「川」や越え難い「峠」という地形上の条件が加わることで、この「境界」は、約束の履行を困難にする「障害」の意味を持つ事になるのである。また、その障害に、「川」の洪水や「峠」の山賊という一層困難な条件が追加されることで、メロスの力走は単なる「越境」の域を越えて、ほとんど「苦行」の意味を持つ事にもなる。つまり、メロスは、この「苦行」の故に一層高揚し、純化しながら、終末の刑場の場面に立ち至るのである。その「苦行」の力走が、日没間近の太陽の照り返しを受けることで勇壯を極める事は、これまた言うまでもあるまい。ここに、太宰治が実際のシラクサの地

形を無視してまで、夕日に向かって力走するメロスを描く最大の理由がある。

六 物語の深層部

さらにもう一つ重要なことは、こうした別世界への「越境」を主題とした太宰の物語の構図が、例えば、須佐之男命や大国主神、更には、桃太郎や一寸法師など、我國の神話やおとぎ話でお馴染みの「英雄誕生」の物語の構図とも重なり合うことである。駒木敏氏によれば、こうした別世界の構図は、元は「それぞれの祭祀共同体が、アイデンティティの依り所として探り求めた神のトポス」だったというが、「いずれの異界にせよ、ナカツクニとの接点にサカ（ヨモツヒラサカ・ウナサカ）」を持ち、それを越えることで、神々は自分のアイデンティティを確立するのだと言う（注16）。こうしたアイデンティティ確立の意味を持つ伝統的な物語の構図の取り込みもまた、太宰の創作の結果である。

次に、もう一つ、重要な事がある。この物語の原話がシラーの「人質」（一七九八年作）からヒギヌスの寓話（紀元後二世紀？）にまで遡ることは、良く知られた事実である。ところが、エリザベス・フレンツェルによれば、そのヒギヌスの寓話のモチーフは、実際は更に時代を遡って、紀元前三四〇年ころタレントウム市（イタリア）のアリストクセネスがディオニシオス二世から直接聞いて記したピタゴラス関係の記録の断片に辿り着くと言う（注17）。すなわち、その記録の断片によれば、話の主人公はダーモンとフィンティアスと言い、二人は揃ってピタゴラスの弟子達が作っていた一種の修導会の会士でもある。また、この修導会は、同じ意見を持ったピタゴラスの弟子達が細

かく定められた規則に基づいて結び付いた共同体で、会の目的は、会士達の中に身を屠しても互いに助け合うような性格と精神とを養うことにあった（注18）。

ところが、そのピタゴラス会士のひとりフィンティアスが、ある日突然国王ディオニシオスに暗殺者の容疑で逮捕され、死刑を宣告される。それを知ったダーモンは、臨時に出獄するフィンティアスの保釈保証人となることを申し出る。だが、それは、ピタゴラス会士達の有名な信頼関係を試すためにディオニシオスの側近達が仕組んだ罠だった。そして、フィンティアスが無事ディオニシオスの元に戻った時、ディオニシオスは、フィンティアスとダーモンとを両手で抱き締め接吻して、彼等の仲間入りを希望する。しかし、二人はこれを拒絶する（注19）。

これらの原話に照らせば、私達は容易に、太宰が描いた「勇者」の特徴に気付く筈である。一体、ただの石工や牧人がピタゴラスの弟子になることがあるだろうか。シラーの「人質」に照らして見ても、メロスは、シラクサの町に住まいを持ち、友人を持ち、留守番の忠僕を置く人物で、おまけに、シラクサから少々離れた所にも妹を住まわせるような生活の拠点を持っている。こうした条件に照らして、おそらく原話の世界のメロスの身分は、農業奴隷を使つて近郊の農地を耕作するシラクサの市民だったものと思われる。当然親友のセリヌンティウスもシラクサの市民だったと考えてよいだろう。それを太宰は、わざわざただの牧人と石工の友情の物語に書き換えたのである。ちなみに、太宰は、シラーの原詩でメロスの家の忠僕として登場するフィロストラトスをセリヌンティウスの弟子に書き変えているが、この改訂もまたメロスの身分の書き変えに付随した改訂では無かつただろうか。

次に、もう一つ、この二人の友情の質についても、大きな食い違い

が生じている。すなわち、原話の世界の二人が、思想信条を共にした修道会の「同志」だったのに対して、『走れメロス』の中のメロスとセリヌンティウスとは同じ村に生まれ育った「竹馬の友」である。もし、原話の中の友情を「同志的結合」と呼ぶなら、太宰が描いた友情は「地縁的結合」と言うことも出来るだろう。また、この「地縁的結合」の特徴が、厳しい訓練や思想信条の錬磨を問わず、人と人とを包括的に結び付ける母性的なものであるために、この物語の結末では、国王ディオニスも容易に二人の友情の輪の中に迎え入れられる。こうした友情の質に照らしても、太宰の『走れメロス』は、極めて日本風の骨格を備えたおとぎ話に近い性質を持つと言つてよいだろう。

七 結び

さて、この作品の結末に臨んで、メロスとセリヌンティウスとは、刑場の衆人環視の中で互いに一発ずつ殴り合い、その後、深々と抱擁する。ここにはまだ、牧人社会の慰安や和睦の儀式としての「抱擁」が生きている。アイベスフェルトによれば、もともと「抱擁」とは、「母親的な保護の身ぶりからなぐさめやあいさつの身ぶりに儀式化されたもの」だという(注20)。その抱擁に至るまでにメロスが経験したことは、命を懸けた国王との対立と長い力走と一発の制裁、これらを経て、メロスはようやく「男」に成るのである。

一方、王宮の壁と衛兵とに守られたディオニスは、地縁に隔てられて病んでいる。その深刻な人間不信の症状は、既に繰り返して述べた。そのディオニスの目の前で、メロスとセリヌンティウスとの手で「友情」の堅さが示された時、ディオニスは王宮の壁を抜け出て二人に近付き、顔を赤らめてこう言う。「どうか、わしも仲間に入れてくれ

まいか」。こうして、「地縁の絆」に危機をもたらした国王も改めて地縁の絆の中に迎え入れられる。このディオニスの参加によって、牧人社会が育んだ「地縁的結合」のモラルは、いつそう強固で普遍的なモラルとして再生する。かくして、ここに、神話的な構造を備えた「地縁の絆」の危機と再生の物語が誕生するのである(注21)。

(1) 小野正文『走れメロス』の素材(『郷土作家研究』第十号、昭和四十八年十二月発行)によると、太宰治が高等小学校一年(大正十一年四月から大正十二年三月まで)の時に学んだ国定教科書『高等小学読本巻一』の第三課に「真の知己」として、この話が収録されている。その話では、メロスは突然シラクサの町にやってきている。これなら、地理的な矛盾はない。

(2) 以下、本文の引用は『太宰治全集3』(筑摩書房版)による。但し旧漢字は適宜新漢字に改めた。

(3) 『家族―その社会史の変遷と将来―』(正岡寛司著、学文社刊、七四頁)。

(*印) は筆者の注。以下同じ。

(4) 『家族・私有財産及び国家の起源』については、内藤吉之助訳、有斐閣大正十一年刊・西雅雄訳、白揚社昭和二年刊・マルクス・エンゲルス全集 第十二巻 田中九一訳、改造社昭和三年刊・西雅雄訳、岩波文庫昭和四年刊・『社会思想全集第八巻』田中九一訳、平凡社昭和六年刊など、古くから翻訳も出回っていた。一次期左翼の学生だった太宰なら読んでいたものと思われる。太宰と共産主義との関わりについては、本多秋五の『太宰治と共産主義』(『新装版文芸読本 太宰治』河出書房新社)に詳しい。

(5) 『家族、私有財産および国家の起源』エンゲルス著、岩波文庫、七一頁。

(6) エブリヌ・シュルロ他編『女性とは何か(下)』人文書院刊、二三四―五頁

- (7) エブリリーヌ・シュルロ他編『女性とは何か(下)』人文書院刊、二三
八―九頁
- (8) 『世界地名大辞典』「シラクーザ」朝倉書店刊による。
- (9) また、その付近には、「ディオニスの耳」と名付けられた「Latomia
del Paratiso」(石材切り出し用の坑道、兼囚人のための牢獄。国王ディ
オニスは、この坑道を使って囚人の会話を盗み聞きしたと伝えられる)
もある。前掲『世界地名大辞典』「シラクーザ」による。
- (10) 『家族、私有財産および国家の起源』エンゲルス著、岩波文庫、八七
頁。
- もつとも、この意見には多少の異論も有り、L. H. モルガンは、「婚
姻が彼女の氏族との関係をすべて切断しそうにはないし、また妻はそ
の父の氏族に依然として属していたことは疑うべくもない。」とも言
う(『古代社会(上巻)』岩波文庫三〇八頁)。いずれにしても、古代ギリ
シャのポリスでは母系の役割が大きく後退していた事は疑いない。
- (11) 『RHETORIKA』「ディオニス一世」(池田忠生)教育出版セン
ター刊。
- (12) 『ヨーロッパ古代史論考』角田文衛著、平凡社刊、一四八頁。
- (13) この作品の直接の出典が、小栗孝則訳『新編シラー特集』(改造社文
庫第二部第三百編)であることについては、高山裕之「走れメロス」
素材考(『日本文学』昭和六十年十二月号)参照。また、角田旅人「走
れメロス」材源考(『香川大学一般教育研究』昭和五十八年十月発行、
『太宰治Ⅱ』日本文学研究資料叢書、有精堂刊、再録)にも同様の指
摘がある。
- (14) エブリリーヌ・シュルロ他編『女性とは何か(下)』人文書院刊、二三
八―九頁。
- (15) ヨーロッパの古代都市の規模が意外に小さいことは、ボンヘイヤロ
ームを歩いてみてもよく分かる。これは、「一日生活圈」(その日の内に、
仕事に出かけ、仕事を終えて帰ってくる事の出来る範囲)が、徒歩の
場合せいぜい四里に制限される事が原因だと言われている。
- (16) 「カミのトポロジ」(『伝承の神話学』広川勝美編、人文書院刊、五
十二頁―五十四頁)所収。
- (17) Elisabeth Frenzel, "Motive del Welliteratur": Stuttgart: Kroner,
1980) P200.
- (18) 前掲書二〇一頁。
- (19) 前掲書二〇〇頁。
- (20) 『愛と憎しみ』アイブルアイベスフェルト著、日高敏隆他訳、みす
ず書房刊、二〇九頁。
- (21) 「走れメロス」が発表された昭和十五年は、日中戦争の拡大に伴う兵
員と物資との欠乏が国民各層の利害の対立を引き起こした時代でもあ
る。「欲しがりません勝つまでは」(『贅沢は敵。』など、国民に耐乏を呼
びかけた各種の標語を思い出せば、その深刻さが分かるだろう。農村
共同体のモラルは深刻に傷ついていた。当然、誰もが、心中深く共同
体のモラルの復旧を叫ばなければならなかった。
- 津軽の地主の家庭に育った太宰治も、その例外ではない。彼は、学
生達に向かって、「憂鬱淫酒の王ディオニソス」(『太宰治全集一〇』所
収)「諸君の位置」(『月刊文化学院』昭和十五年三月号?)となることを
避け、「おほらかな、強い意志と、努めて明るい高い希望を持ち続ける
為にも、諸君は今こそシルレルを思い出し、これを愛読するがよい」(『太
宰治全集一〇』所収)「心の王者」(『三田文学』昭和十五年二月)と
説き始める。また、彼は、更に一步踏み込んで、「日本は、決して好戦
の国ではありません。みんな平和を待望して居ます」(『太宰治全集一〇』
所収)「三月三十日」(『満州生活必需品会社機関誌』昭和十五年六月)
とあからさまに「平和」を待望する一方、「共栄」を支持せよ。信ず
べき道、他になし」(『太宰治全集一〇』所収)「かすかな声」(『帝国大
学新聞』昭和十五年十一月二十五日)と、やや声高に「共栄」を主張
する事もあった。
- これは、勿論かなり曖昧な発言だが、それを承知で、今、取り急いで
この発言をまとめれば、この非常時に対する太宰の主張は、権力者

の退廃を退けると共に、おおらかな強い意志と明るく高い希望を持つ人達によって「平和」と「共栄」とを實現するという形で纏められるだろう。また、この発言が、発言の時期と言い、ディオニソスと言い、シルレルと言い、シラーの「人質」を念頭に置いた発言であることは疑いない(これは、既に角田旅人「走れメロス」材源考)(『香川大学一般教育研究』昭和五十八年十月発行、『太宰治Ⅱ』日本文学研究資料叢書、有精堂刊、再録)に指摘されている)。さらに、その彼の主張が「走れメロス」の世界に具現している事も、既に見た通りである。太宰治は、この非常時の混乱に竿差し、農村共同体のモラルに依拠した時に初めて健康な寓話を書き得たのではあるまいか。